

沼津市若山牧水記念館

第25号

2000.11.25

編集・発行
〒410-0849

社団法人 沼津牧水会
沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX (0559) 62-0424
E-mail:bokusui@thn.ne.jp

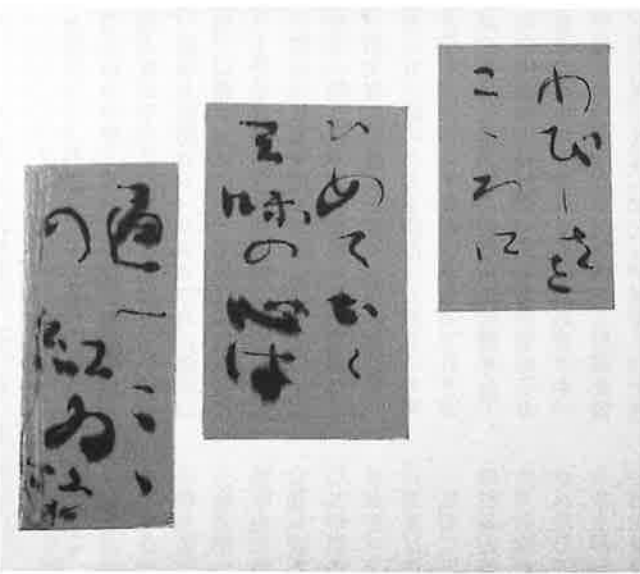
若山牧水「紙入れの歌」の色紙

わびしさをこゝろにひめてひく三味の
心は通へこゝの紅る

牧水記念館の収蔵品の中に、赤い小さな三枚のもみ（紅絹＝紅花を揉んで染めた絹布）に短歌が書かれたものを貼り付けた色紙がある。牧水記念館の所蔵品の中では異色の色紙であった。

寄贈者は、函南の石谷八重さん。寄贈を受けた日は、昭和六十三年三月二十七日。この日の記録によると、八重さんは、お嫁さんの石谷八千代さんに付き添われて、記念館においてなられ、「私がついているより記念館に」と話されたという。この時、八重さんは八十三歳。振り返って数えると、牧水と出会ったのは二十一、二歳か。

牧水晩年の昭和二年のある日、二人の若い娘さんが千本の牧水の家を訪れた。体調がやや持ち直して無聊を託っていた牧水はたいへん喜び、しばらく歌の話などしてその来訪を迎えてくれた。娘さんの一人、浅島八重さんは、東京に住んでいたが、たまたま沼津に移り暫く千本に住んでいた関係で、『創作』全国大会など、華やかな活動を続ける牧水に憧れて友人を誘っての訪問であった。



二人は稽古中の三味線の苦勞話などを語り、それを受けて、何事も根気が肝要などと牧水が語ったのであろう。「ここの紅る」は紙入れの裏地のもみの紅に掛けて赤心の意でもあるうか。当時の女性は、懐紙を折り畳んで、布製や紙製の懐紙入れに入れて持って歩いたのである。娘さんたちは和服だったのだろう。

三折りの紙入れを広げると、裏生地は三枚になる。絹の鮮やかな紅色が牧水の創作意欲を刺激したのかも知れない。「記念に何か」という娘らの控え目な要求に応えるように、八重さんの持ち合わせた紙入れの裏生地に短歌一首を書いた。もう一人の娘さんが誰か、その娘さんも短歌を書いてもらったのかどうかは調べようがないが、書いてもらっていいのだが、と思っている。

この紙入れの裏生地へ書かれた作品は、八重さんの手に秘められて誰も知ることなく、長い年月が過ぎた。八重さんは、紙入れの裏地を剥ぎ取り色紙に仕立てて、大切に持って石谷家に嫁いだ。やがて大陸に渡って、戦中・戦後の混乱を経たのだが、その混乱の中でもこの色紙を手放さず持ち続けたのであった。いかに心の拠り所として大切にしていたか伺い知れよう。

それから六十余年、こうして、この作品を紹介できるのは望外の喜びである。牧水と若い女性とのある日の交情と、そこから生まれた紙入れの歌。即興歌であり、そのまま手を離れたこともあって牧水の全歌集には載っていないが、こんなふうに即興で残した歌がまだまだ多くありそうで、興味は尽きない。作品の背後にある物語を楽しんでもらいたいものである。

(須永 秀生)

牧水祭日録 山河慟哭の歌

福島泰樹

(第四回若山牧水賞受賞者)

九月六日(水) 宮崎空港から日豊本線特急「日輪」に乗り換え五十分、日向市駅に到着する。若山牧水の故郷(東臼杵郡東郷町) 坪谷を訪ねるのは今回で六度目。

最初に訪ねたのは、一九七四年七月。

宮崎在住の歌人志垣澄幸の運転するスカイラインに乗って、伊藤一彦、浜田康敬と四人で蟬時雨を浴びながら、牧水生家から溪谷のむこう尾鈴の山々を眺めた感慨は忘れがたい。「日向国宮崎県東臼杵郡東郷村大字坪谷村は、山と山との間に挟まれた細長い峡谷である。ことに南には付近第一の高山である尾鈴山が、けはしい断崖面を露はして眼上に聳ええている」と、牧水が『おもひでの記』にしたためた牧水誕生の地・坪谷に、私は牧水終焉の地・沼津(愛鷹山麓柳沢に私は居住していた)からやって来たのである。

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の夏のゆふぐれ

風に揺れる床の間の掛け軸を見て、酒を持参しなかつたことを心底後悔していた。

二度目は、一九九一年十二月。宮崎、鹿児島で開催された「短歌絶叫コンサート」のステージを終え、宮崎在住の詩人本多寿さんと日向市駅で待ち合わせ、彼の運転する車で東郷町山陰の高森文夫宅へ向かった。

高森さんは詩人で、『舷灯』など三冊の詩集をもつ。生年は明治四十三年。牧水の母校延岡中学から

成城高校に進み東京帝大仏文科を卒業後、満州映画協会に入社。敗戦と同時にシベリアに送られ昭和二十四年に帰還。以後は郷里にあつて教育振興発展に尽力。昭和六十年に東郷町町長に就任、「若山牧水生誕百年祭」を挙行、牧水公園もこの人による。

高森家を辞し、牧水生家の囲炉裏の人となった。

牧水生家は、祖父健海が建てた家(天保六年)で一六〇年を経ている。竈のある土間から上がりこみ囲炉裏に腰をおろす。どのような事情があつて若き医師若山健海は、故郷(武蔵国入間郡富岡村神米金)を遠く離れた日向国の山奥へやって来たのであろうか。政変にまきこまれたとでもいうのであろうか。父立蔵重態の報を受け帰省した(懊悩する)若き牧水が見える。祖父母、父母、姉たちが暖をとった囲炉裏である。

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとす
なり山ざくら花

高森さんから頂いた美酒「百年の孤独」の栓を開け、流し場から茶碗を拝借、どくどくと酒を注ぐ。

翌年の夏、再び高森家を訪ねた私は、今度は高森さんと生家の囲炉裏で酒盛りをしている。最初は土間に続く茶の間の囲炉裏で、それから座敷に上がり込んで、愉快的な酒を浴びた。一期一会の囲炉裏の梯

子である。

四度目に坪谷を訪ねたのは、一昨年の六月、高森さんの訃報に接してであった。

叡光院獄桜徳運大居士

柩の中に瘦せた温顔があつた。この人が逝き、中原中也の時代が終わったのだと思つた。山桜をかぎりなく愛された人であつた。牧水生誕百年祭を記念して町役場前に「山ざくら花」の巨大な歌碑が建立された。

五度目に坪谷を訪れたのは、今年の二月。

私の二十番目の歌集『茫漠山日誌』(洋々社)に第四回若山牧水賞が与えられ、宮崎での授賞式と祝賀会、延岡での記念講演を終え、東郷町での祝宴に招かれたのである。

牧水が少年時代を過ごした延岡市の野口会館には、七百人もの聴衆が詰めかけてくれた。「山河慟哭の詩心」と題し、断念からさらなる出発をした牧水の短歌を語った。この断念に引き寄せ中原中也を語った。

わが小枝子思ひいづればふくみたる酒のにはひの寂しくあるかな

中原中也は、三十歳というその短い生涯の間、三度までも牧水誕生の地(宮崎県東臼杵郡東郷町)を訪ねている。東郷町山陰には、詩友高森文夫がいる。昭和七年十二月、東京に雪が降る宵に二人は出会っている。恋人に去られ、友人とも断絶した(孤独な)

中也是心の友を求めて徘徊していたのだ。

中原の勧めで、高森は帝大仏文科に入学。ようやくに処女詩集『山羊の歌』を刊行した意気軒昂の中也。二人の交友は（文夫弟の）高森敦夫をまきこんで進展してゆく。

立つてゐるのは、材木ですぢやろ、

野中の、野中の、製材所の脇。

立つてゐるのは 空の下によ、

立つてゐるのは材木ですぢやろ。

日中、陽をうけ、ぬくもりもすれば、

樹脂の匂ひも、致そといふもの。

夜は夜とて、夜露うければ、

朝は朝日に、光ろといふもの。

立つてゐるのは、空の下によ、

立つてゐるのは、材木ですぢやろ。

中原中也『未刊詩篇』に収められている「材木」は、東郷町散策のおりの作である。中也は、しみじみとした口調で語ったという。「なあ、高森よ、大学をやめて俺と二人で此処で製材所をやろうじゃあないか」。

また頭に血がのぼつてのことであろうと高森さんは相手にしなかった。昭和十二年十月天折した詩人の追悼号（『四季』）で未発表の詩「材木」と出会い、あれは本心であったのか、もし俺が中也の言を聞いてやっておれば、あのような死に方はしなかっただろうと、高森さんは悔やんでおられた。

天折した友を片時も忘れられない高森さんは、やがて友からの書簡八十通を携えて満洲映画協会に入

社。中原中也が親愛の情をもって書き綴った書簡の束は満州で没収。

そんな経緯を私は、記念講演で語ったのだ。

紫の豊旗雲のたなびきに朝の思ひの行へ知らず

も

そして六度目の訪問は今回。九月九日、東郷町総合文化センターで開催される「第50回若山牧水祭記念/福島泰樹短歌絶叫コンサート/山河慟哭の歌」出演のためである。三日も前に来たのは取材のためである。

いま私は角川書店から刊行されている月刊誌『短歌』に、「中原中也の東京」という評論を連載している。一回三十枚、すでに十九回五七〇枚を書いてきた。大正十四年三月、十七歳の中原中也が年上の女、長谷川泰子を伴って上京してから、その足取りをたどって書き進んできたのだが、連載十四回目から東京を離れ牧水誕生の地「宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷」に来てしまったのだ。高森文夫さんとの二度にわたる会見のテープを起こしていたら、これまで中也研究家が一言もふれていない新たな証言に出会い、改めて驚かされてしまったからである。

今回の取材の大きな目的は、高森家に残されている書籍や書簡を見せていただくことと、私が少年時代から愛読していた中原中也の詩「溪流」の舞台になった場所を探ることである。

日向市駅の改札口には、日向牧水顕彰会の渡辺邦彦さん、東郷町教育委員会（文化振興係）の若藤公生さん、福田建材社長の福田誠志さんの三人が迎えて来て下さっている。途中、七、八メートルもある「福島泰樹短歌絶叫コンサート」の巨大な看板に驚

き、車を下車。学校林のある東郷町の入口は、公園として整備され、自然石が積み上げられた一郭に

静けきになく鳥きこゆ啼く声にこもれる命あり
がたきかも

の牧水の歌碑。最終歌集「黒松」（没後十年後に刊行）所収、昭和二年春の作。この年の七月、朝鮮方面揮毫の旅の帰路、下関に到着した牧水は、大分、延岡で揮毫、最後の帰郷をなしている。病身の老母とはどのような会話を交わしたのであろうか。どのような感慨をもって長男牧水は父の墓の前に立ったのであろうか。四十二歳にしてすでに晩年の若山牧水が見える。

雨に煙る坪谷川を渡ると、左手に（ハンドルを握る）福田さんの建材店。

「此処に建てたいと思ってるんですよ。すでに用地も買収しています。」

野中に立っている材木撮影のため建材店に立ち寄ったのはこの二月。祝宴で御馳走になった後、牧水公園の町営コテージで一泊した私たちは、教育長の都甲欣一さんや役場の皆さんの案内で、登校時の坪谷小学校、牧水生家、牧水記念館を見学した後、高森家から福田建材店に向かったのだ。早朝であるというのに行く先々で酒が振る舞われ、牧水賞に改めて深甚の謝意を表した次第であった。

黒き帽子黒き背広着て街路ゆくとありめづら
に來し友のたよりに

ほどなく羽坂地区の集会場に到着。

屋根のある広大な野外ゲートボール場には、机が並べられ地区の人々が私を歓待してくれるというの

だ。

延岡での私の牧水賞受賞記念講演（高森文夫と中原中也の若き日の交流を語った）が機縁となり、中也詩碑建立の運動が進展しているという。三十人もの人々との野中の酒盛りは、実に愉快なものであった。大皿に盛られた鮎、蟹、海老などは今朝方、漁をしたものであるという。心尽くしの煮物の甘かったこと。町の古老本多茂雄さんの詠う牧水短歌朗唱のもてなしも、この地方ならでのこと。宮崎からは（高森文夫の末弟の）亮二さんが駆け付けて下さった。高森さんの葬送の後、中也「材木」の舞台となった「野中の、製材所の脇」を案内して下さったのはこの人である。

酒をたらふく頂戴し宿舎に帰る。

九月七日(木) 日向第一ホテルに迎えの車。町からは税務課長の黒木幸男さんが、県からは文化振興課の藤山雅彦さんが同行してくれるという。公用車に乗っての取材は初めてである。

まず山陰の高森家へ。仏壇に御挨拶をし、お茶を頂き、資料を撮影させていただいてから取材へ向かう。空は快晴である。残暑のさなかであるが、蒸し暑くはない。

疲れはてしころの底に時ありてさやかにうかぶ
涙のおもかげ

それは私の直感であった。死を前にした中原中也は、時空の彼方に去ってしまったあの至福の時間を思い浮かべていたのであろう。これは高森文夫との友情の詩である。

溪流で冷やされたビールは、
青春のやうに悲しかった。
峰を仰いで僕は、
泣き入るやうに飲んだ。

ビショビショに濡れて、とれさうになつてゐる
レットルも、
青春のやうに悲しかった。

しかしみんなは、「実にいい」とばかり云つた。
僕も実は、さう云つたのだが。

湿つた苔も泡立つ水も、
日陰も岩も悲しかった。
やがてみんなは飲む手をやめた。
ビールはまだ、溪流の中で冷やされてゐた。

伊藤一彦と初めてこの地を訪れた（いまだ若かりし）日の私は、坪谷の溪流に出会い、「溪流」を口ずさみながら、そう直感したのである。その時は、中也が三度もこの地を訪ねているなどということに気づいてはいなかったのだが。

だが、高森さんに会い、「姐さんをあげて、中也と酒を飲んだ」という旅館の話に及び、私の直感は現実味を帯びてきたのだ。「溪流」四聯目は、「水を透かして瓶の肌へをみてみると、僕はもう、此の上歩きたいなぞとは思わなかつた。／独り失敬して、宿に行つて、／女中と話をした。」と連なっているのではないか。

山陰小野田の入舟旅館は車の往来せわしい街道沿にひっそりとして佇んでいた。女主が迎えてくれた。すでに営業はしていないとのこと。建物は百数十年前のもの、村の婚礼や祝い事の多くは此処でおこな

われている。二階の座敷に上がり、眼下を流れる溪流に出会い、目的が達せられたことを知った。

旅館名は筏流しが盛んであった頃、船が停泊したことから「入舟」と名付けられたのであろう。村の婚礼や祝事の多くが此処でおこなわれている。床の間を背に村の人々に囲まれた若山牧水が見える。

独りあつひとつほしては一つ酌ぐさびしき酒の
われのいのちか

夜は、日向市の酒亭で、町長主催の宴席に招かれる。小林理教町長とお会いするのも二月の祝宴以来。総務課長の荒砂建一さん、若藤さん、藤山さんと実に楽しい酒をいただく。小林町長に、取材協力の礼を述べると、私の「短歌」連載を楽しみにしているという返事が返ってきて、恐縮。また角川書店から刊行が始まったばかりの『中原中也全集』を取り寄せているとのこと。

夢は、文学村に広がってゆく。

九月八日(金) 朝七時、ホテルフロントに出てみると黒木さんが車を回して下さっている。二月に引き続き、坪谷小学校へ。坪谷小学校は、牧水生家前の国道三二七を耳川沿いに西に少し行った所にある。若山牧水が、羽坂尋常小学校から坪谷尋常小学校に転校したのは、明治二十五年、牧水七歳の時。

この二月、登校風景に感動した私は、録音と撮影の申し出をしていたのだ。

前回同様、菊池伸裕教頭先生が迎えて下さる。小藤治己先生が校門に駆け出て行かれた。もうすぐ集団登校の姿が見られるぞ。



校舎の入口には(日捲りの)牧水の歌が墨書されている。
今朝の一首は

春白昼まびらこの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

青春の歌『別離』掉尾におかれた一首だ。地区グループに分かれて登校する生徒達は、歌の前に整列し独特の節回しで朗唱するのだ。日捲は百枚、卒業までの六年間で必ず百首を暗誦してしまうという。愛の歌もあれば、別離の痛苦を詠った歌もある。もちろん酒の歌もある。短歌の情感(いや牧水の山河慟哭の詩心とおう)は、自然に彼らの生活の中に溶け込んでしまおうであらう。

録音を藤山さんに御願いし、私は写真を連写する。

もう一校、案内します。
黒木さんは、さらに国道を西へ走り、同じく東郷町立越表小学校に案内してくれた。

国道から山道を上ってゆくと、山の中に鉄筋コンクリートの立派な校舎と近代的な体育館。村中田浩二校長先生と教頭先生(名刺をもらい損なっていました)が、校内を案内して下さい。現在生徒数は十二人、教師は八人。先生方は教育の他、広大な施設の掃除に日々負われているという。ついこの間までは、山の中から二時間もかけて登校してくる生徒がいたという話に、思わず目頭を熱くしてしまう。校長先生と教頭先生は、学校の下にある教員住宅に二人っきりで生活しているという。文字通りの僻村の小学校なのである。(児童の減少にもめげず学校を存続させようとしている東郷町は偉いぞ、と思った。生徒が一人でもいるかぎり廃校にしないで欲しい)

よりあひてますぐにたてるあを竹のやぶのふか
みにうぐひすのなく

広大な校庭の脇に瀟洒な築山。築山には「よりあひて…」の牧水の歌碑。

元の歌は「よりあひて真すぐに立てる青竹の藪のふかみに鶯の啼く」

児童が暗誦できるように、仮名書きしたのである。「寄り合いてますぐに立てる」に歌碑建立の人々は(生徒への)万感をこめたのであろう。第十二歌集『溪谷集』所収、大正七年二月七日伊豆土肥での作、牧水三十三歳。

東郷町に来ていくつかの歌碑を見学して思ったことは、郷土の人々が東郷町という場所に拘泥してい



ないということである。郷土での作から選ばば、秀歌はいくらでもあるのに、敢えてそうしようとはしていない。

おそらくは、日本国中(朝鮮もある)で詠まれた牧水の歌のすべては、わが郷土が生んだ牧水のものであるという、絶大なる敬慕の想いがそうさせるのであろう。おらかなインターナショナルリズムという。

台風の通過が心配されていたが、案の定、午後からは雨。山陰の立派な役場(庁舎である)に隣接して、東郷町総合文化センターはある。メンバーは無事宮崎空港に到着したであろうか。台風が心配だ。三時からハリハール。五百数十人を収容するという会場は、音響、照明のセッティングで慌ただしい。大きな和室の楽屋を占拠してハリハールの準備にとりかかる。

新たな台本の作成である。

あやふかるいのちを持ちておのもおのも生きこ
らへたり逢はざらめやも

豪雨の中、ミュージシャンの無事到着に安堵。ギ
ターの龍と組んだのは私が沼津在住の頃であるから
もう二十五年。ドラムパーカッションの石塚俊明、
尺八の菊池雅志と組んでからすでに十六年、ピアノ
の永畑雅人が加わり、短歌絶叫コンサートのいまの
スタイルができあがってからすでに十五年。ともか
くこのメンバーで全国八〇〇を超える過激なコン
サートをこなしてきたのだ。

バイオリンの平松加奈を加えてフルメンバーでの
コンサートは今回で三度目。

二時間にわたるリハーサルを終え、篠突く雨の中
を日向市へマイクロバスで移動。県振興課主催の前
夜祭は、割烹料理屋の「牧水」。今年初めての松茸を
頂戴する。



東郷町牧水祭での筆者と榎本館長夫妻

九月九日(出) 台風之余波を受けて土砂降りのコン
サートだ。人は集まるのだろうか。しかし、申し込
みが殺到し、すでに定員五五〇人で締め切ったと
のことだ。

楽屋で昼食をとっていると伊藤一彦が入ってくる。
早稲田大学西洋哲学科同期伊藤との出合いが、宮崎
との出合いに繋がった。大学二年の学期末テストの
前日、下落合の伊藤の下宿を訪ねたのは東京オリ
ンピックの年一九六四年だから、伊藤との付き合いも
三十六年になる。

最初に私の口から出たのが、牧水の「ああ接吻海
そのままに日は行かず鳥翔まひながら死せ果てよ
い

ときそはむ
友よ酌めさかづきの数歌のかず山のさくらの数

記念講演「21世紀に生きる牧水」の後、ステージ
に立った。新曲「牧水」を尺八奏者の菊池雅志に依
頼してある。しかし、送った台本は、若山牧水の歌
を連ねた牧水ではない。歌集『中也断唱』以来二十
数年、一人称詩型短歌を逆手にとりつつ、人称の超
克を試み続けてきた私の短歌作品「牧水」である。
若山牧水『みなかみ紀行』をバッグに私は牧水の
後を追った。

別盃を酌んで綺麗にわかれゆく牧水紀行の酒の
数々

洋灯もついに消えてわが汽車は白黒あやももわかぬ
闇進みゆく

温泉のふつふつとして湧きいでし涙堪えて別れ
し女か

醉眼を閉じて淋しく頭を振りしあわれ牧水張子
赤牛べいごならぬを

われはただ蕩々として寂しきに六台村小雨をゆ
く雨合羽

牧水が「みなかみ紀行」に歌いたる吾妻郡暮坂
をゆく

脚絆草鞋手には蝙蝠傘尻端折しりばしり中折帽子が峰超
えてゆく

脚絆草鞋蝙蝠傘杖に旅鳥 山の彼方にさいわい
あらず

血の雨と思いいしかな両眼あわれ紅葉の滴るご
とし

雨に濡れ顔えおるのかましろなる竜胆の花きみ
にあらねど

楓ぶな滴るばかり紅ければ血のみなかみを下り
ゆくのみ

老木となりし楓がはらはらと風に吹かれて落と
す紅葉

そして牧水の旅の歌に最も相応しいカール・ブツ
セの「山のあなた」を晴朗な音調で絶叫した。「山の
あなたの空遠く／「幸」住むと人のいふ。／嗚呼、わ
れひと々尋めゆきて、／涙さしぐみかへりきぬ。／山
のあなたになほ遠く／「幸」住むと人のいふ」

さびしさのとけてながれてさかづきの酒となる
ころふりいでし雪

牧水の詩を台本にした新曲「ちんちくりんの歌」、
ラストは龍に作曲を依頼した「山河慟哭の歌」だ。

敗北の涙ちぎれて然れども凜々しき旗をはためかさんよ

火群なす命脈の秋をしかすがに天に慚じずに生きてゆくには

直截に剣の如くに生きたきを濺々としてわれ溶

鉢舻

立ったまま眠らんものをうら若き死者ゆえ碧き血を滴らす

蹴起せよ！ 砂礫を噛みて生きゆくか群鷗われの逆巻く荒野

しろがねの夢よ、乳房よ、白桃よ、わが渺茫の山河をゆくに

これら私が山河を跋渉しつつ作った作品の中に、(不遜と想われる方もいるかもしれないが) 牧水の歌の数々を解き放つてみたのである。つまり牧水短歌の韻律の中にはなく(喩法を重視した) 現代短歌のただ中にある。

五人の演奏者たちと共に私が絶叫した牧水短歌の歌の数々は、どのように聴衆の五官に響いたか。

アンコールを求める拍手の嵐に響かされて、開演前の私の危惧は吹き飛んでいた。瞬く間に三時間が経過していたのだ。嵐の拍手を浴びながら私は叫んでいた。

そうだよ、歌は意味であると同時に、声であり音であり叫びであるのだ。それゆえの牧水ではないか。

けふもまたころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあぐがれて行く

雨の中を帰ってゆく一期一会の観客の皆さんをお見送りしていると、沼津市若山牧水記念館館長の複

本篁子さんと御主人の尚美さん。笑顔の懐かしいお二人だ。

打ち上げの宴席へ。町長さんの挨拶がころに沁みた。ミュージシャンも大はしゃぎである。明け方就寝。

十月十日(日)

仏教雑誌『大法輪』の取材で編集部黒神真也さんが同行してくれている。坪谷へ向かう。昨夜の雨は上がり雲間に青空が覗いている。と思った途端だった、尾鈴の山を雲が覆い牧水生家の墓を雨が濡らす。

晴れた日も悪くはないが、私の家の眺望は雨の日が特にいい。それは雲と山との配合が生きて来るからである。...

一朝雨降るとなると山全体が、いやその峡谷全体が、真白な雲で閉ざされてしまふ。そして



短歌絶叫コンサート「山河慟哭の歌」

その雲の徂徠によつて到るところ霰の多いその嶮山が恰も靈魂を帯びたかの様に躍動して見えるのである。

まことに牧水が『おもひでの記』で語ったとおり情景が眼前に広がっている。

牧水生家の小高い丘の巨大な歌碑の前には酒を満たした二つの手桶。歌碑に酒を注ぐのだろうか。雲の間からふたたび青空が覗いている。これから五十回目を迎える牧水祭がいよいよ始まるのだ。

列席者が歌碑に献酒の間、絶えることのない朗唱。坪谷中学校生徒、坪谷小学校児童による牧水の歌の合唱に涙していた。短歌が歌謡であることを忘れてしまつてはならない。昼の祝宴中途で牧水の里を後にする。

羽田から東京(吉祥寺の)曼荼羅へ直行。毎月十日は、月例コンサートだ。先発したミュージシャンは、すでに音合わせを終えている。昨日に引き続き「牧水」を絶叫しよう。

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り

筆者プロフィール 歌人。台東区下谷法昌寺住職。昭和十八年東京下谷生れ。早稲田大学文学部卒。歌集『バリケード・一九六六年二月』で歌壇にデビュー。その出版記念会の席上で、自作の朗読を試みる。一九七五年、ステージ活動を開始。現在、東京吉祥寺で月例絶叫コンサートを開催中。これまでに全国八百以上のステージを数える。第二十歌集『茫漠山日誌』で第四回若山牧水賞受賞。歌集のほか、著作は六十点をこえる。月光の会主宰。

第十一回中学生短歌コンクール

若々しい感性とやわらかさ

本年の作品数は二千四十九首。ちなみに一昨年度は千二百十四首、昨年度は千四百八十二首、これを見ると年ごとに作品数は増加している。中学生の短歌への関心の高まりと考えると大変喜ばしいことである。そもそも短歌は日本古来の文学であり、今日まで連綿と詠み歌いつづけられてきた国民文学でもある。今回は二千四十九首の中から特選十首、入選作四十首を選んだ。それぞれの作品には個性があり、豊かな人間性がにじみ出ており、発見が見られた。特に若々しい感性とそのやわらかさを感じとることが出来た。

今年の選者は、沼津牧水会理事の青木朝子、川口和子、須永秀生、曾根耕一、杉山芳春の五人である。次に特選作品十首を紹介する。

亡くなってやつと気づいた思い出はわずかに

おう父のワイシャツ 第五中 古屋 千里

木々達の葉のすきまよりふりそそぐ私をてらす

光のシャワー 第三中 横内 万也

かみの毛を切った次の日人気者その次の日は平

凡人な 第三中 榎原 円

「悩むなよ」そんな言葉が切なくて今を大事に生

きていきたい 今沢中 横田 唯

勝ったかな情報入らず次の朝勝利をかくしんし

んぶんひらく 原 中 大場 和也

絹かさね脱げば千粒もろこしの夏の小さき陽は

かがやけり 第二中 今井美沙子



それじゃあね祖父のおみまいその後でがまんして
いた涙あふれる 金岡中 佐藤 悦子

「もう、ねるね」机に向かう私の背に言いつつ母
は夜食をつくる 金岡中 望月のぞみ

今世紀最後の月食みせようとふろの私に声をか
ける母 片浜中 秋山 史枝

太郎杉剣のごとくにそびえ立つその迫力に疲れ
吹きとぶ 愛鷹中 齋藤 勇介

ワイシャツに嗅覚をはたらかせた感性の良さ。差し込む光をシャワーと捉えた目。人気者から平凡な人への切り返し表現の面白さ。「悩むなよ」と励ます友情と生き方。不安と確信にゆれる心理描写。たしかに見て確かに表現する写生技法のすばらしさ。「それじゃあね」と言つて別れた人間性。母親の優しい愛、「もう、ねるね」の余韻。月食を媒介とした母の思いと叙情。太郎杉に勇気づけられる若者の映像等みな前向きで快い。

次の九首は、入選作品の中から選んだ作品である。

グランドの熱をおびてる白い砂僕らの影がする
どく映る 第三中 齋藤 裕一

伸び盛りいつのまにやら差がちぢむ私のかたと
母さんのかた 第五中 岡田 萌

目を開けぬ祖父に別れを告げた後心にしみたう
ぐいすの声 原 中 上原 隼

ポロポロの地図をたよりに急ぐ足あせる心にひ
びく雨音 原 中 石井あゆみ

赤ん坊初めて立ったその瞬間家族みんなで大喜
びだ 金岡中 大庭美佐子

夕ぐれに「帰りたいくない」靴をなげそう言う私
にさしこむ夕日 金岡中 川村 香織

「いらっしやい」病室のすみ祖母が呼ぶ小さい顔
が静かに微笑む 金岡中 渡部 友紀

梅雨明けのニュースに祖母が今日つるす風鈴が
鳴る夜を迎えて 長井崎中 望月 茉未

はりつめた座禅の空気にとまどつて自分の心を
どこにおこうか 愛鷹中 久保田郁未

(杉山 芳春)